小さいとはいえ、島はそれなりの大きさがあった。

入り江の反対側にはテトラポットで組み上げられた小規模な防波堤と漁港。
そこに隣接して建てられた数軒の小屋。
それ以外は鬱蒼とした森が島の中央部に向け小高く盛り上がり、一見して人の住まぬ無人島の景観を呈していた。
ヨシオと加夏子は丁度、その森の真ん中辺りを進んでいた。

「ねぇ、こっちに行くと何処にでるの」

加夏子は不安になって訊ねた。

「ふね、あるから」
「船って、さっきの港にもあったよね。どうしてそれに乗らないの」
「あれ、おじさんたちのふね。かってにのっちゃいけない」
「おじさんたちって？」
「とうちゃんのともだち。いまは、おさけ飲んでねてる」
「だったらいいじゃない」

加夏子は気が気ではなかった。

ここが島だというのは判った。
こんな所には病院どころか民家さえ無いだろう。
下を見れば出血がヨシオのズボンをびっしょりと濡らし、振り返ると道には点々と血の跡が残っていた。
早く病院にいかねばヨシオが危ない。

ひどく急いた加夏子の声に、ヨシオが足を止めた。
小岩のような頭を巡らし、肩に載せた彼女を見上げる。

「ひとのもの勝手につかっちゃいけないんだよ。かあちゃんがいってた」
「おかあ…さん、が？」
「うん」
「ヨシオのおかあさんって、今どこにいるの」
「しんじゃった。ぼくがとうちゃんより背がちっちゃいころに」
「そうなんだ…」

焦燥が固く握らせていた加夏子の手が、ヨシオの首からゆるりと離れ、ごつい頭を優しく撫でた。

「ワタシのお母さんも死んじゃったんだ。今のお母さんは、ホントのお母さんじゃない」
「おねえちゃん、かあちゃんがふたりいるの？」

点のような目を見開いてヨシオが聞いた。

「ウン。でも、今のお母さんも大好きよ、ワタシ」
「いいなぁ…ぼくもかあちゃんほしい」
「…」

加夏子は何も言えなくなってしまった。

　　がさっ

脇の茂みで何かが動く音がした。

「！？」

ビクンと顔を振り、加夏子はそちらを見た。
トラックのハンドルを切ったように、ゆっくりとヨシオが向きを変える。

「なんだぁ？　そのバカでっかいのは」

汗だくの北山が茂みから姿を現した。

「北山さんっ！」

加夏子はヨシオの肩の上で叫んだ。

「来てくれたんだ」
「無事だったようだな、にしてもソイツは…」

ずんと足を踏み変え、ヨシオが北山へ向けて丸太のような腕を突きだした。

「おねえちゃんいじめにきたのか？　あっちいかないとブッ飛ばすぞ！　ぼく強いんだぞっ！！」
「おぃおぃ、ブッとばすってお前、血だらけじゃないか」

血まみれのヨシオが構えるさまは手負いの巨象が向かってくるような迫力があったが、北山はどこ吹く風で言葉を続けた。

「刺されたのか？　お前」
「いたくなんかないやっ！　おねえちゃんがだいじょうぶっていったもん！！　ちょっとケガしただけだっていったモンっ！！」

加夏子が目を伏せた。
口元を歪ませた北山は、両手をポケットにつっ込んで足元の土を蹴っていた。

すっと躯が沈む。

次の瞬間、重い音と共にヨシオが真後ろにひっくり返った。
加夏子も振り落とされたが、今度は草の茂っている場所に落ちたおかげで気を失うことはなかった。
したたか背中を打った加夏子が飛び起きると、尻餅をついたヨシオがぽかんとして北山を見上げていた。

自分の体重の２倍はあろうかという相手を、北山のタックルは見事にひっくり返してみせたのだ。

「なにすんのよっ！」

加夏子が叫ぶ。

「動くなボウズ…」

ヒステリックな声に耳も貸さず、かがみ込んだ北山はヨシオの腹に巻かれた布を触り傷の具合を確かめた。

「こりゃマズい。いくら頑丈でもこれじゃ保たん」
「え？」
「出血が酷過ぎる。体力はあるだろうが、保って１時間ってとこだ」

髭面をしかめて北山が呟いた。

「ぼく…ぼく、しんじゃうの？」
「あぁ、死ぬ。このままじゃな」

不意に猛烈な怒りがこみ上げ、加夏子は目の前の北山に怒鳴った。

「なんでそんなこというのよ！　死んじゃうなんていうのよ！！　ヨシオは大丈夫なんだから！　助かるんだから！
勝手に殺すなよっ！！　死ぬなんていうなよぉ！！　バカヤロウッ、クソオヤジッ！！　」

半べそのまま加夏子は怒鳴り続けた。
立ち上がった北山が、ヨシオの頭を撫でながら彼女を見た。

「助けたいか。このボウヤも」

べそかき顔のまま、加夏子が頷いた。

◇

日の沈んだ暗い森の中を三人は進んでいた。

先頭をゆくヨシオの肩には加夏子。
後ろを気にしながら歩く北山の手は、ヨシオのズボンのベルトをしっかりと掴んでいた。

時折、ヨシオの巨体がぐらりと揺らぐ。
そのたびに北山はぐいと足を踏ん張り、彼が倒れないよう支えていた。

「ぼく…ねむい…」

驚くほど弱々しい声でヨシオが呟く。

「寝ちゃダメ！　もうちょっとなんでしょ、船のある所まであとチョットなんだよね？」

答える代わりに、ヨシオはずどんと大地に膝を落とした。

「ヨシオッ！？」
「ぼく…もう、だめ…ねる…」
「ヨシオ？　ヨシオォォ！！」

北山に抱き止めらた加夏子の目の前で、ヨシオは地響きを立てて俯せに倒れた。

「いやぁぁぁ！　ヨシオー！！！」

半狂乱の加夏子をそっと地面に降ろすと、北山は素早くヨシオの側に駆け寄り、うんせと気合いをかけて巨体を仰向けに転がした。

「ボウズ、俺が判るか」
「おじ…ちゃん…？」
「船は何処だ？」
「ここ…おりた…どうくつ…の…なか…」
「よく頑張ったな。お前はここで休んでろ、俺とおねえちゃんが医者を連れてくる」
「ぼく、ねてもいい？」
「あぁ、目をつむってジッとしてろ。お腹を押さえて、動くんじゃないぞ」
「…おじちゃん、いいヒトなんだね。ぼく、ジッとしてる…」
「ヨシ、えらいぞ。ヨシオは立派なおとこのこだ」

ヨシオが微かに微笑んだ。

「いくぞ、ここからは俺がおぶってゆく」

立ち上がった北山が加夏子に向かい言った。

「こんな所に置いてったら死んじゃうよ、お願い、ヨシオも連れてって」

「無理だ」
「北山さんっ！」
「悪いが、いくら俺でもこんな馬鹿でかい奴とアンタを纏めて抱えちゃいけねぇ。ヨシオを助けたきゃ一刻も早く助けを呼ぶしかない。その為には俺達がここから脱出しなきゃならないんだ」
「そんな！　そんなのってないよ！！」

必死に這いずってきて足にしがみついた加夏子の顔を、屈み込んだ北山は両手でガッシリと挟み込んだ。

「ワガママいうなっ！　来るのか、こないのかっ！？」

……

少しの沈黙。
やがて加夏子の頭がこくんと動いた。